

## 感染予防に留意した新しい実習方法のあり方 —Open CEASを活用した老年看護学オンライン実習の展開例—

山崎尚美<sup>1)</sup>、杉本多加子<sup>1)</sup>、上仲久<sup>1)</sup>、島岡昌代<sup>1)</sup>、松原寿美恵<sup>1)</sup>、吉井重子<sup>1)</sup>、  
大久保由美子<sup>2)</sup>、福本久代<sup>3)</sup>、坂本昭子<sup>4)</sup>、佐々木喜代美<sup>5)</sup>、伊東厚子<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 畿央大学健康科学部 看護医療学科 (〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2)

<sup>2)</sup> 医療法人友誼会 西大和リハビリテーション病院 (〒639-0218 奈良県北葛城郡上牧町ささゆり台3丁目2-2)

<sup>3)</sup> 社会医療法人 平成記念病院 (〒634-0813 奈良県橿原市四条町827)

<sup>4)</sup> 平成まほろば病院(〒634-0813 奈良県橿原市四条町82-1)

<sup>5)</sup> 介護老人保健施設 鷺栖の里 (〒634-0813 奈良県橿原市四条町85-1)

## A new training method that pays attention to infection prevention -Example of online practicum in Gerontological nursing using Open CEAS-

Naomi YAMASAKI<sup>1)</sup>, Takako SUGIMOTO<sup>1)</sup>, Hisashi UENAKA<sup>1)</sup>,  
Masayo SHIMAOKA<sup>1)</sup>, Sumie MATSUBARA<sup>1)</sup>, Sigeko YOSII<sup>1)</sup>,  
Yumiko OKUBO<sup>2)</sup>, Hisayo FUKUMOTO<sup>3)</sup>, Akiko SAKAMOTO<sup>4)</sup>,  
Kiyomi SASAKI<sup>5)</sup>, Atsuko ITO<sup>3)</sup>,

<sup>1)</sup> Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kio University  
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

<sup>2)</sup> Nishiyamato Rehabilitation Hospital  
(3-2-2 Sasayuridai, Kanmaki-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 639-0218, Japan)

<sup>3)</sup> Social Medical Corporation Heiseikinenkai  
(827 Sijyou-cho, Kashihara-city, Nara 634-0813, Japan)

<sup>4)</sup> Heisei Mahoroba Hospital  
(82-1 Shijo-cho, Kashihara City, Nara Prefecture 634-0813)

<sup>5)</sup> Long-term care health facility Sagisu no Sato  
(85-1 Shijo-cho, Kashihara City, Nara Prefecture 634-0813)

Keywords：老年看護学実習 感染予防 ICT教育 オンライン実習 Open CEAS

### 緒言

2020年は、全国的なCOVID-19の感染拡大防止により本学の講義・演習・実習形態も大幅な変更になった。コロナ禍においては病院と教育機関との連携と課題は必須とされているが、授業や演習においてもシミュレーション教育を活用し<sup>1) 2)</sup>、教育の質の担保のためには日ごろからの行政や病院との情報共有の必要性が再認識されている<sup>3) 4)</sup>。授業や演習においては、「新しい授業様式のあり方」<sup>5)</sup>や「ICT活用した遠隔授業のあり方」<sup>6)</sup>の報告がされており、オンライン授業への関心と新たな課題も明らかにされつつある<sup>7)</sup>。

筆者らは「学生の学びを止めない」ことを目標に時代の流れに適応すべく遠隔授業・演習の準備や変更へ対応のために奔走した。その反面今までやろうと思っ  
ていても踏み出せなかったe-Learningシステムのさらなる活用やICT教育の充実など可能になった。このことは、看護教育のあり方を模索していた筆者らにとって教育方法を見直すことのきっかけとなった。また、本学では入学時よりモバイルパソコンを貸与し、かつOpen CEASという授業支援型e-Learningシステム（以下、Open CEAS）<sup>8)</sup>やMicrosoft Teams®を併用したe-Learningシステムを本格的に展開することで、教育の質保証のための学生の「学びを止めない」

ことへの一助となっていた。

臨地実習においては、日本看護系大学協議会の調査報告によると、実際に臨地で実習において計画変更になった大学は全国222校のうち207校（93.2%）であった（日本看護系大学協議会:2020）<sup>9)</sup>。本学の看護医療学科においても、複数の病院・施設から実習中止の連絡があったが、幸いにも老年看護学実習においては2020年8月～12月までの4か月間において感染状況を鑑みながら対面とオンライン実習を組み合わせたハイブリット型実習を実施することができた。その中で、他大学と同様に教員と臨地の指導者との協力を得て、可能な範囲での創意工夫をしつつ、手探りの中での実習指導であったが<sup>10)</sup>、学生・教員・指導者ともに新しい時代を切り開いているという実感と乗り越えたという手ごたえを感じられたことも否めない。また、老年看護学実習のあり方を模索する機会になっていたので「感染拡大防止」「e-Learningシステムの活用」「新しいオンライン実習の方法」の視点において今後の実習指導のあり方の検討をすることとした。

## 用語の定義

オンライン実習:インターネットに接続し、離れた場所でe-Learningシステムを利用した実習を示す。

## 目的

2020年度の感染予防に配慮した老年看護学実習の展開方法とその実際を明らかにし、「新しい実習形態のあり方」を検討することを目的とする。

## I. 老年看護学に関する科目体系

### 1. 講義

講義としては、対面授業で2年次に老年看護学対象論で「高齢者の身体的・心理社会的特徴」と「高齢者を取り巻く社会保障制度」や「高齢者が生活する場所」の理解をねらいとして一斉講義で教授し、また身近な高齢者にインタビューし、グループワークにより幅広い個人差や心理・社会的特徴の理解を促していた。また、2年次後期には、老年看護学援助論Ⅰにおいて、「高齢者に多い疾患・症状の理解」とその「看護方法」について一斉講義と一部、グループワークを通して自己学習の方法を教授している。

また、授業教材の公開やレポート課題の提出についてはOpen CEASを使用して提出確認している。実習評価は、実習目的と合致した「医療福祉シス

テムの理解」「情報アセスメント・看護計画」「看護の実施」「専門的態度の修得」の4項目から構成されている25項目があり、評価軸は1から4段階のリッカート方式により学生が自己評価をすることおよび教員の他者評価を加味し総合的な評価方法を取り入れている<sup>11)</sup>。評価は、2018年度より学生の主体的自己評価としてループリック評価表を使用し、教員評価している<sup>12) 13)</sup>。

### 2. 演習

演習としては、3年次前期に老年看護学援助論Ⅱの授業で看護過程の展開として紙上事例の高齢者の「アセスメント」「看護の焦点化」、および必要な「看護計画」について個人ワークとグループワークを展開し、50人ずつの小クラスで共有していた。また、技術演習では「高齢者疑似体験」「移動・移乗」「アクティビティ・ケア」「摂食・嚥下」に関する事前学習をしたうえで、演習確認することを実施している。演習前の事前学習の提出管理や事後のレポート課題の提出については、講義同様にOpen CEASを活用している。技術演習の評価としては、学生間での他者による客観的観察評価、技術チェックリストを使用しての自己評価を併用している。

### 3. 臨地実習

臨地実習においては、8月に5日間（1単位）の施設実習と15日間（3単位）の病棟実習の合計4単位の対面実習を展開している<sup>11)</sup>。施設実習では施設サービス、通所サービスを利用している65歳以上の高齢者を1人以上受け持ち、インタビューを行い、「施設利用の目的・概要」「高齢者ケア施設で働く看護師の役割」について看護職にシャドーイングを行い観察した内容から看護職の役割を学んでいる。また、病棟実習においては、1グループに教員1人に対して学生3-4人の小人数制で編成しており、65歳以上の高齢者を1人以上受け持ち、「看護過程の展開」を学び、「高齢社会の現状と課題」「あるべき高齢者看護の役割」についてレポート課題を課している。実習記録やレポート課題は、紙ファイルに整理保管し、実習最終日に提出して終了となる。

## II. 老年看護学実習の概要

以下は、老年看護学実習の概要を示したものである（表1）

表1. 年間の老年看護学に関する科目と時間数

	学年	時期	科目	単位	時間数	評価(ループリック評価含む)	
講義	2年次	前期	老年看護学対象論	2単位	15コマ (30時間)	筆記試験 レポート課題	出席カード レポート課題
		後期	老年看護学援助論Ⅰ	2単位	15コマ (30時間)		
演習	3年次	前期	老年看護学援助論Ⅱ	2単位	15コマ (30時間)	実習記録 レポート課題	変更なし
臨地実習		後期	老年看護学実習	4単位	4週間 180時間		

### Ⅲ. 従来の実習展開方法から2020年度の変更点の概要

以下に、2020年度の科目形態の変更点について列記する（表2-1,表2-2）。

表2-1. 2020年度 老年看護学実習の概要

老年看護学実習	
目的	老年期を生きる人を統合的に理解するとともに老性変化や生活機能障害、健康障害による弊害を把握し、高齢者およびその家族の生活の質を尊重した看護ができる基礎的能力を養う。また、実習体験を通して老年看護を取り巻く社会状況を理解し、老年看護の望ましい在り方を考えることができる。
目標	1) 介護老人保健施設・有料老人ホーム・通所施設で生活する高齢者の生活やケアの実際、施設ケアにおける看護職の役割および通所サービスでの看護の実際を、実習を通して学ぶことができる。 2) 老年期の特徴をふまえて高齢者の多様性やその人らしさを理解できる。 3) 生活機能障害・健康障害をもつ高齢者のその人らしさを尊重した看護援助ができる。 4) 高齢者を取り巻く社会状況を理解し、老年看護の望ましいありようを考えることができる。 5) 看護職に必要な専門職としての態度を修得することができる。
期間	施設学内実習：2020年8月17日～8月21日 臨床実習：2020年8月31日～12月18日
対象	看護医療学科3年次学生86名
施設学内実習	
臨地実習	
方法	1～4クール目 実習期間は3週間であるが、実習日数・時間を短縮し臨地は7日間とする（施設実習含む）開始時間は10時開始15時まで（前半は12時まで）とする。実習内容は患者との対面時間はマスクを着用し1回30分以内とする。 5クール目 施設実習のみ臨地で1日行い、臨地とはオンライン実習とする。
内容	1～4クール目 1日目：実習オリエンテーション（自宅：Teams） 2日目：施設実習 3日目～5日目：病院実習は10時～12時とし患者紹介、情報収集、一部援助計画、実施を行い翌日の確認後帰宅する。カンファレンスは自宅にて15時～16時で指導者・教員が参加し、各病棟30分ずつ行う。 6日目～9日目：個人ワークを自宅で行う。Teamsにて教員・指導者より指導やフィードバックを受ける。10時～10時20分は病棟挨拶、行動計画発表を行い、看護展開を指導をうけながら実施する。可能な範囲で受け持ち患者とTeamsでつなぎ、挨拶、処置・リハビリを見学する。14時から15時にカンファレンスを病棟と30分程度Teamsでつなぎ実施する。 10日目～13日目：病院実習は10時から15時までとし、病棟挨拶、計画発表後一部援助計画・実施評価を行う。14時から15時に各病棟30分程度カンファレンスを行う。 14日目：グループワーク（自宅：Teams）10時より全体オリエンテーションを行い、発表資料の作成を行う。 15日目：グループワーク（自宅：Teams）10時より全体オリエンテーションを行う10時10分より12時まで各グループの発表を学生主体で行う。グループ発表は質疑応答を含め10分程度である。全体発表会の終了後、記録の整理を行い大学に記録提出を行う。ただし、移動手段等の感染防止の観点から持参が困難である場合は郵送可能であり、事前に科目責任者に申請する必要がある。 ＊各クールによっては祭日等の関係で日数の違いはあるが、臨地実習期間の7日間（施設実習含む）は確保した。
5クール目（変更内容）	
施設実習は臨地で1日実施する。病棟での実習は中止し、自宅より、Teamsをつなぎリモートで実施する。担当患者はグループで1人検討して頂く。情報収集はTeamsで指導者・教員が口頭で伝え、学生が必要な情報は質問しその内容について口頭で返答する。担当患者とTeamsをつないだ面会は出来る範囲で行ない、学生は挨拶、コミュニケーションや情報収集を行う。また看護計画で立案したケア内容、アクティビティケア内容は病棟指導者・教員が看護計画に沿って実施し、学生はTeamsを通して見学または参加する。	

表2-2. 2020年度老年看護学施設実習スケジュール一覧表

月日 曜日	担当教員	8月17日 月	月日 曜日	8月18日 火	8月19日 水	8月20日 木	8月21日 金
G名	グループメンバー	10:00～17:00 オンライン(自宅) 老年看護学全教員	時間 10:00～17:00 場所 上仲・島岡・松原・吉井 担当教員	10:00～17:00 実習室	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本
1G	1G-A (上仲)	・学内演習 オリエンテー ション  ・臨地実習オ リエンテー ション	演習内容 ＜学内演習＞ 10:00～10:40 更衣・演習オリエンテーション  10:40～12:10 移乗  12:10～13:00 昼食・休憩 13:00～14:30 アクティビティケア  14:40～16:10 食事と栄養 16:20～17:00 本日のまとめ・記録	アクティビティケア	食事と栄養	「車椅子の移動・移乗」	
	1G-B (島岡)						
	1G-C (松原)						
	1G-D (吉井)						
G名	担当教員グループメンバー	時間 10:00～17:00 場所 オンライン(自宅) 担当教員 山崎・杉本	10:00～17:00 実習室 上仲・島岡・松原・吉井 山崎・杉本	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本		
2G	2G-A (上仲)	・学内演習 オリエンテー ション  ・臨地実習オ リエンテー ション	演習内容 「車椅子の移動・移乗」	＜学内演習＞ 10:00～10:40 更衣・演習オリエンテーション  10:40～12:10 移乗  12:10～13:00 昼食・休憩 13:00～14:30 アクティビティケア  14:40～16:10 食事と栄養 16:20～17:00 本日のまとめ・記録	食事と栄養	アクティビティケア	
	2G-C (島岡)						
	2G-B (松原)						
	2G-D (吉井)						
G名	担当教員・グループメンバー	時間 10:00～17:00 場所 オンライン(自宅) 担当教員 山崎・杉本	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本	10:00～17:00 実習室 上仲・島岡・松原・吉井 山崎・杉本	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本		
3G	3G-A (上仲)	・学内演習 オリエンテー ション  ・臨地実習オ リエンテー ション	演習内容 「車椅子の移動・移乗」	＜学内演習＞ 10:00～10:40 更衣・演習オリエンテーション  10:40～12:10 移乗  12:10～13:00 昼食・休憩 13:00～14:30 アクティビティケア  14:40～16:10 食事と栄養 16:20～17:00 本日のまとめ・記録	食事と栄養	アクティビティケア	
	3G-B (島岡)						
	3G-C (松原)						
	3G-D (吉井)						
G名	担当教員・グループメンバー	時間 10:00～17:00 場所 オンライン(自宅) 担当教員 山崎・杉本	10:00～17:00 オンライン(自宅) 山崎・杉本	10:00～17:00 実習室 上仲・島岡・松原・吉井 山崎・杉本	10:00～17:00 実習室 山崎・杉本		
4G	4G-A (上仲)	・学内演習 オリエンテー ション  ・臨地実習オ リエンテー ション	演習内容 「車椅子の移動・移乗」	＜学内演習＞ 10:00～10:40 更衣・演習オリエンテーション  10:40～12:10 移乗  12:10～13:00 昼食・休憩 13:00～14:30 アクティビティケア  14:40～16:10 食事と栄養 16:20～17:00 本日のまとめ・記録	食事と栄養	「車椅子の移動・移乗」	
	4G-B (島岡)						
	4G-C (松原)						
	4G-D (吉井)						

施設・学内実習においては、5日間で25人ずつの学生が設定した課題に基づきローテートするとしたオンラインで実習を展開し、そのうち1日間は老年看護学実習で体験する機会の多い技術演習で「高齢者の移動と移乗」「アクティビティ・ケアの実施」「摂食・嚥下機能を3項目体験するという内容とした。

また、講義・演習から臨地実習開始までの経過と変更内容について以下に説明する。

1. 学内技術演習を後期の学内実習に先送り  
特に前期は、4月～6月頃の間は登学できない時期もあり、本来のスケジュールでは6月～7月に実施する技術演習（老年看護学援助論Ⅱ）は、一

気に演習ばかりの授業にならないように学生の負担回避のため、他の教科目との調整を図りつつ、8月の学内実習の期間に変更して実施した。また、50人クラスで2回に分かれて行う技術演習も密を回避するために、3種類の演習科目を1日で完結する方式に変更した（1日3コマ×25人）。

2. 施設実習を技術演習とオンライン実習に変更（①施設・学内実習:5日間）

- 1) 従来は、8月に5日間の施設実習において、高齢者ケア施設（特養・老健・有料老人ホーム・デイケア等）で1日のインタビュー実習と看護職へのシャドーイングにより看護の機能と役割を学ぶ実習を展開していたが、2020年度は5月の

時点で高齢者ケア施設（13か所）への一斉実習は困難であると判断し、病院併設型の施設4か所のみに1日の対面インタビュー実習を残し、各クールの病棟実習の初日に変更した。

- 2) そして、表記を施設・学内実習と変更し、上記2の学内技術演習（1日間）とオンライン実習（4日間）を設定した。
  - 3) オンライン実習では、実習オリエンテーション後に、実在している高齢者の2事例のイメージ化のために撮影した動画教材を活用してのアセスメント、看護計画の立案、高齢者ケア施設（ユニット型特養）の看護師の役割、認定看護師による摂食・嚥下障害のある高齢者の看護のミニ講義の内容とした。
  - 4) 実際、教員が高齢者施設に出向きオンラインによるライブ配信で現地と学生をつなぎ実習を展開した。また、看護師による腸瘻の管理の説明だけでなく、施設内のストリートビューやキッチン場面を動画配信した。後期のインタビュー実習をイメージ化するために、学生が撮影承諾のあるデイスサービス利用の高齢者5人をインタビューするという体験も取り入れた。摂食・嚥下認定看護師によるミニ講義は、本来は老年看護学援助論Ⅱの講義時のゲストスピーカーであったが、岐阜県内からオンラインで配信してもらい、技術演習への動機づけとした。さらに、基本的な技術に関しては、医学書院のオンライン教材（当時は無料配信）を活用して、学生が1人で自己学習ができるように準備した。これらのことは、学生にとってはアクティブラーニング・教員にとってもアクティブティーチングの一助となっていた。
3. 病院実習を対面とオンライン実習のハイブリット型の実習形態（②施設病棟実習:15日間）
- 1) 病棟実習で使用する病院併設型の施設4か所のみに1日の対面インタビュー実習を残し、各クールの施設病棟実習の2日目に変更した。
  - 2) 病棟実習3-5日目の3日間は、午前中のみの情報収集期間とし、6-10日目は、オンライン実習期間とした。また、11-13日目は、10-15時までの実施評価期間とした。
  - 3) 病棟実習14-15日はグループワーク・Teams発表会のオンライン実習と設定した。
  - 4) 最終日には実習記録の提出を義務付けたが、感染エリア等で登学が困難な学生に対しては郵送も可とした。
4. 感染予防対策に関する指導の徹底

登学時には、学科内で作成した感染予防対策マニュアルVol.8を熟読して感染予防を遂行することを指導し、更衣室は小教室を使用し、体温測定から健康チェック、更衣、実習室への移動までの学生の動線（一方通行）指導をしつつ密にならない環境整備を行った。さらに、座席指定をして学内のゾーニングをし、技術演習中は、うがい手洗い・マスク着用、フェイスシールドの使用、定期的な換気を徹底した。このことは、看護職を目指す学生にとっても教育的視点での学習効果があった。

#### Ⅳ. ハイブリット型臨地実習の展開の実際

##### 1. 学習環境の整備

###### 1) Wi-fi環境の確認

学生は、wi-fi等の学習支援金（大学からの助成）を受けて、実習開始までには学生全員環境が整った状態でスタートしている。また、病院内においては大学から実習用wi-fiルーターを1個ずつ使用し、不足部分は教員研究費のwi-fiルーターで対応した。

###### 2) 実習期間中の実習用iPadの貸与

学生は、1年次より貸与PCを使用しているので慣れた環境下でのオンライン実習開始となっている。しかし、不測の事態が発生した場合は教育基盤センターと連絡して、即日に修理・交換の対応をしてもらった。

受け持ち患者との画面上の情報収集時やコミュニケーション時は、学生に実習専用のiPadを貸出して、返却後にはすべてのデータを削除する作業を教員で行った。また、病棟にはiPad1台を毎日貸出し、（返却後は老年教員の鍵のかかるロッカーに保管して）、老年領域から賦与した老年アドレス（大学アカウントではない）にMicrosoft Teamsで招待して使用してもらった。

###### 3) 病棟側のオンライン実習の場所の確保

病棟ごとにより指導者の待機場所（PCをつなぐ場所）は異なっていた。電子カルテをすぐに閲覧できるので病棟のステーション内の希望があり、カンファレンス室での個室を希望されたため、各施設・各病棟と相談しながら情報管理が可能で密にならない場所を設定した。個室の際には、ハウリングしないようにヘッドセットを購入し、使用することで対応した。

###### 4) 患者やキーパーソンへの同意説明

基本的には、対面実習時と同様に、事前に病棟

師長もしくは指導者から本人とキーパーソンに説明していただき、当日に教員・指導者・学生から口頭と書面で説明し、同意確認を行った。同意書には、従来の個人情報保護の内容とともにITリテラシーに則り、実習内容をPCやiPadで録画・録音・撮影することは禁止していることを強調して指導した。同意書と誓約書は、今までと同様に患者と病棟で1部ずつ保管した。

- 5) 指導者とのデバイスの使用方法の共同学習  
教員も指導者もスマホやiPadは使用しているが、実習での使用は初めてであったため、老年看護学教員により使用マニュアルを作成し、双方で管理や使用方法の確認を行いながら実習を進めた。  
ある程度、指導者が固定していたため2クール目からは操作に関しては問題なく進行できていた。

## 2. 実習要項の変更

### 1) 実習の再構成

前述の①施設・学内実習と②施設病棟実習に再構成した。



写真1. 特養看護師による講義



写真2. 滴下数の説明場面

### 2) 実習目標（到達目標）と評価

特別な変更はしておらず、期間中に目標を到達できるようにシミュレーション教育を取り入れてオンライン教材の作成や活用をすることに内容を変更した。

5クール目のみ、1病院のみですべてオンライン実習としたため、別途の要項を作成した。



写真3. 腸癰の閉塞防止のケア

## 3. 施設・学内実習の概要（①）

「この実習は、学生が自宅で4日間のシミュレーション教材を活用し、リアルタイムで臨地実習を行う内容と1日間の技術演習を学内において実施する内容で構成した。

### 1) 活用したシミュレーション教材

活用したオンライン教材は、医学書院のナーストレーナー（オンライン版）、京都科学eナース（オンライン版）および教員で作成した自作のシミュレーション教材である。

### 2) 作成したシミュレーション教材の例

#### ①老健 移動乗降時の対応

Take1 <https://youtu.be/jnsO4W25WVE>

Take2 <https://youtu.be/jwUmujrHzEw>

#### ②老健 食事を開始できない高齢者への対応

Take1 <https://youtu.be/qwaHCoF95Lc>

Take2 [https://youtu.be/NQ\\_PB4PWOPY](https://youtu.be/NQ_PB4PWOPY)

上記、①②適切な事例と不適切な事例を提示し、視聴後に課題シートを設定し、オンデマンド教材として自己学習できるように設定した。

### 4. 施設・病棟実習（②）での看護過程の展開方法

この実習は、「高齢者理解」を目的に、高齢者ケア施設で1日間高齢者にインタビュー体験をする内容と、回復期リハビリテーション病棟で時間を短縮して6日間、「看護過程の展開」を行う内容で構成した。以下に、その実習方法を説明する。



写真4. 摂食嚥下の関する演習



写真5. 移動・移乗に関する演習

#### 1) 使用したデバイス

学生は、貸与PCと実習用iPadを使用した。指導者には、実習用iPadを都度貸出して、カンファレンス、患者撮影や動画撮影に使用した。

#### 2) 指導を強化したITリテラシー教育

1年次の情報演習の授業時の想起を促し、改めてITリテラシーに則り、オンライン時の録画・録音・撮影は禁止していることを毎回強調して指導した。

#### 3) 受け持ち選定の条件

受け持ち患者の条件として以下を依頼時に説明した。

- (1) オンライン実習であることを承諾されている高齢者
- (2) iPadによるコミュニケーションが可能であり、認知症などからリロケーションダメージの予測の少ない高齢者
- (3) 言語障害（失語症や構音障害）、極度の認知機能の低下がない高齢者
- (4) 学生の受け持ちが負担でない高齢者
- (5) 学生1-2人に対して1人の高齢者を受け持

ち、看護過程の展開を体験し学修する。

5クールのみ、1病院で1病棟4-5人の学生が1人の高齢者を受け持つこととなっていた。

#### 5. カンファレンス方法

カンファレンスについては、原則毎日15時から自宅からオンラインで実施した。学生は、その日の未解決な疑問や情報収集方法、患者とのコミュニケーションのあり方や必要な援助について、看護の焦点を明確にできるように今まで以上に指導者に質問していた。アセスメントや記録の整理をする時間は、従来の対面実習時よりも多くあり、情報からの分析・解釈については学生との格差が大きくなっていたため、グループダイナミクスの活用を試みたが、臨場感に欠けるためオンライン上でのグループワークは対面時よりも困難であり学修には限界があった。しかし、学生のアンケート結果からもその日のうちに自己の疑問が解決できることは学生の不安の軽減につながっていた。

#### 6. 評価方法

- 1) オンライン実習における学生の学びと成績評価  
評価項目は、例年同様に「医療福祉システムの理解」「情報アセスメント・看護計画」「看護の実施」「専門的態度の修得」の4項目から構成されている25項目で、評価は1から4段階のリッカー方式により学生が自己評価をすることおよび教員の他者評価を加味し、指導者等の意見も踏まえて総合的な評価をした。成績評価としては、前年度とほぼ同様でありばらつきが小さくなり個人差の少ない成績評価であった。

### V. 考察

以下に、「感染予防対策」「Ooen CEASを活用した実習の効果」「オンライン実習のメリットとデメリット」の視点で考察する。

#### 1. 感染予防対策について

コロナ禍における臨地実習の感染予防対策としては、学科内で共通認識として作成した感染拡大防止マニュアルを用いて指導したが、感染予防の必要性や具体的なスタンダードプリコーションによる感染予防の方法を学生は学ぶ機会となり<sup>15)</sup>、実習中には感染者が発生することなく実習を終了している。このことは、学生への動機づけや感染予防対策の実績を積む機会となり、今後の実習指導にも活用できると考える。また、オンライン実習時に自宅での学習環境を可能な範囲で整えることで、外出の機会を軽減することができ、かつ感染予防にもつながったと考える。特にカンファレン

スを自宅で行い、時間短縮をして通勤時の混雑を避けたり、食事の機会を少なくしたりする配慮は「新しい生活様式」<sup>14)</sup>に則った実習のあり方になったと考える。

## 2. Open CEAS（授業支援型e-Learningシステム）を活用した実習の効果

Open CEAS活用した実習の効果としては、ITリテラシーおよび個人情報保護に関するセキュリティ教育の強化ができたと考える。また、学生は記録提出期限を遵守することができ、かつ提出を遅れた場合の対応として正しい対応ができるようになっていた。実習記録はセキュリティ上、手書きでしか提出しないもの（Open CEASに保存してはいけないもの）とパソコン入力してOpen CEASに提出しても良いものの様式を明確に指定したことで、学生が主体的に学習に取り組む態度を養うことができたと考える。

一方教員にとっても、Open CEASに記録を提出することで、学生の実習記録が一覧表で可視化できること、コメントを付けてフィードバックがしやすいこと、評価点をダウンロードできることなどの教育指導のスリム化を図ることができたと考える。また、提出物管理が容易であったこと、例えば提出時間に制限をつけて設定できることや学生は遠隔地からの提出も可能なのでタイムリーな指導ができる、フィードバックのやりとりができる、かつフィードバックを文字に残せるため学生は教員からの指導内容を視覚的に可視化でき反復学習できるといった点がメリットとして挙げられる。反面、パソコン上で記録にコメントを記入する場合は、学生が閲覧するとコメントが削除されるため、教育指導の根拠として記録に残す場合は別の様式に記入してコピーするといった作業に膨大な時間を要したことである。

## 3. オンライン実習のメリットとデメリット

オンライン実習において、モバイルパソコンを1人1台ずつ貸与されていたことや、従来からOpen CEASの活用を行っていたことは、オンライン実習に変更になったとしても比較的スムーズに自己学習することができたことの背景的要因として挙げられる。また、学生にメリットになったこととして感染予防できたことはもちろんであるが、今まで対面で実習できていたことが当たり前のようにとらえていたが、他者へ感謝の気持ちを伝えることができるようになり、その伝え方も専門職業人としての真摯な態度を身に着けることができるようになったと考える。

しかし、デメリットとしては直接、患者とコミュニケーションを図り援助するといった実習体験が少ない学生にとっては、「事実から考える力」といった思考の発展（広がり）に制約があったと考える。このような場合には、できるだけリアルな患者像がイメージできるように、バーチャルな患者ではなく、許諾いただいた高齢者を動画撮影し、同様の学習方法を修得できるようにシミュレーション教材を設定して対応することが必要であることが示唆された<sup>16) 17)</sup>。

## 5. オンライン実習における今後の課題

### 1) 受け持ち患者の選定条件

今回は、受け持ち患者は本人の同意が得られていることはもちろんであるが「言語によるコミュニケーションが可能なこと」などの設定をし、臨床側に選定を依頼した。オンライン実習の場合は失語症や構音障害があるとiPadからの音声聞き取りにくく、高齢者に負担を与えてしまう可能性があるため、重度の認知症や失語症のある高齢者の受け持ちは回避する必要がある。

### 2) 教員・指導者へのサポート

各病院に1人の担当教員を配置し、学生指導とともにパソコン操作やTeamsにつなぐ際のサポートを行い、リモート実習が円滑に進められるようにした。このことで、教員間の役割の明確化が図れたためスムーズに進行した。可能であれば、学生指導とは別に配置するとスムーズだと考える。

### 3) ICT教育に必要な機器の準備

学生は、1台ずつ貸与PCを使用しているが、初期化したiPadを1台ずつ貸与し患者とのコミュニケーション時に活用した。また、指導者のフォローアップもできるような体制づくりと、緊急時に対応できるような実習専用のデバイス機器の確保の必要性がある。

## 結語

教員・指導者間では手探りで進めてきた臨地実習であったが、学生には「学びを止めない」ことや「新しい時代を創る楽しさ」を体験するように要項や教材を工夫した。臨地の指導者にも新しいことへのチャレンジには大変なこともあるけれども「柔軟に適応すること」や「これからの時代を創ること」の大切さを一緒に感じながら実習指導を終了することができた。また、時代の変化とともに「変わっていくもの」と「変わら



ないもの」があるが、実習方法は変わったとしても、「ケアの本質」は変わることなくそのことを伝え続けていくことが私たち教員・指導者の役割だと再認識し、教材開発などこれからさらなるIT化に対応していく必要がある。

## 文献

- 1) 新井英靖：学びの質を高めるオンライン授業の工夫（第一回）『アクティブ・ラーニング時代のオンライン授業「個別最適化された学び」を実現するには』,看護展望,Vol.46 No.1,50-54,2021.
- 2) 横内光子,洪愛子：新型コロナウイルス感染症流行下での臨地実習,看護展望,Vol.46, No.1,35-38,2020.
- 3) 林千冬,グレッグ美鈴：感染拡大期における神戸市看護大学の取り組み：学内の体制づくりと自治体への協力（特集 新型コロナウイルス感染症 これからの学校・教育）看護教育,Vol.6 (10),892 - 901,2020.
- 4) 佐藤尚次：新型コロナウイルスの影響下で教育の質を維持するための取り組み,看護教育,Vol.61 (8),688-698,2020.
- 5) 木村哲：医療保健分野における「新しい授業様式」の構築 ウィズコロナ時代のBCPからDXへの飛翔をめざして,看護教育,Vol.61 (10),882 - 890,2020.
- 6) 川尻順平,國分真佐代,江口秀子ら：Zoomを用いた遠隔授業 大学および看護学科全体へ浸透させる取り組み,看護教育,Vol.61 (8),710-715,2020.
- 7) 小澤典子,菅谷智一,浅野美礼：オンライン授業に関する工夫と今後の課題 筑波大学の取り組み,看護教育,Vol.61 (8),716-723
- 8) 荒川雅裕,植木泰博,冬木正彦：授業支援型 e-Learningシステム CEAS を活用した 自発学習促進スパイラル教育法,日本教育工学会論文誌,28 (4),311 - 321, 2004.
- 9) 日本看護系大学協議会：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により臨地実習に影響を受けた 令和3年度新人看護職研修の支援に関する要望書,1-2,2020.  
(youbousyo-MHLW20200825.pdf (janpu.or.jp/2021.03.14閲覧))
- 10) 柴崎美紀,日野徳子,岸知輝ら：訪問看護ステーションとつくりあげるICTを活用した在宅看護学実習,看護教育,Vol.61 (11),994-1003,2020.
- 11) 山崎尚美,上仲久,杉本多加子ら：2020年度畿央大学老年看護学実習要項,13,2020.
- 12) 宮崎誠,山崎尚美,林有学ら：看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告（第一報）－看護教育におけるeポートフォリオ学習の導入－,畿央大学紀要,第15巻,第2号,67-74,2018.
- 13) 山崎尚美,南部登志江,島岡昌代ら：看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告（第三報）－老年看護学におけるルーブリック評価の試み－,畿央大学紀要,第15巻,第2号,83-88,2018.
- 14) 厚生労働省：新しい生活様式の実例,厚生労働省 (mhlw.go.jp) /2021.03.31閲覧)
- 15) 安酸史子：臨地実習の代替策を考えるうえで必要なこと,看護展望,Vol.45 (13),1194-1198,2020.
- 16) 日高艶子：オンラインツール・オンデマンド教材を組み合わせた実習方法とリアリティを追求したシナリオ・シュミレーション,看護展望,Vol.45 (13),1199-1203,2020.
- 17) 坪井 桂子,秋定 真有,石橋 信江ら：オンラインの特性を活かした老年看護学実習,看護教育,Vol.61 (9),940-947,2020.



写真6. 学生と指導者と会話をしている高齢者(掲載了承済)

